

お茶の時間

男の子に料理を教えて

柴田 幹雄 陸自75

新型コロナウイルス感染症対策で学校が急遽休校になり、共働きの両親が戸惑っている。テレビではそんな親たちの苦勞話が紹介されていた。自宅の子供からレンジの使い方がわからないとか、カップ麺にお湯を入れたら蓋をするのか、という電話が職場にまで来て大変だという。男の子は小学校高学年。そんなことも教わっていないのかと別の意味で驚いた。

育休で夫が家にいても何もできず、世話をする面倒が増えるだけ。会社に行っても良かった方が良く、という妻さんの嘆きもあるようだ。

今や多くの独身女性が職を持ち、自立して生活を楽しんでいる時代である。会社帰りの居酒屋や、休日の旅行とグルメ、カルチャーセンターなど人生をエンジョイしているのだ。

女性の結婚感は現実的である。この人と結婚して生活していけるかという視点で見ると。収入や家事能力は当然厳しい査定のみでみられる。今や共働きの家庭はそうでない家庭の倍に上るといえる。結婚後女性も仕事を続けること

が出来るかは、女性の関心事である。

結婚に際し、一般に男性は仕事か家庭かという選択を迫られるとは思っていない。独身時代と同じように仕事をし、家に帰れば妻がいて、家庭のことをしてくれると期待する。女性は仕事か家庭かの選択を迫られ、往々にして今まで楽しんでできた独身生活の楽しみを捨てる覚悟がある。そこまでして結婚したい男はどれほどいるのか。

これからは妻が仕事をするなら夫が家事も分担するのは当然だという意識が必要だろう。現実には共働きの間に育児と家事の負担が女性に偏重しがちだという。夫の「家事は手伝うよ」というセリフに怒る妻は多い。手伝うという単語に当事者意識のなさが露呈する。男性にとつては厳しい時代が来ている。

男性も家事、中でも料理ができることが最低限必要である。自衛官は、飯盒炊きさんから、サブイバルクッキングも教わり、単身赴任も多くて料理の上手な人が多い。息子の嫁さんに料理の話などすると嫁いびりといわれかねない。孫、それも男の子に休校で時間があるなら料理を教えよう。料理のみならず、洗濯、アイロンがけに靴磨きなど得意だからいろいろ教えられる。特に料理は、孫の将来のためにしっかりと教えよう。昔から言うではないか。「男児厨房に入らずんば嫁を得ず」と。